

標準生理学 第7版

小澤瀨司, 福田康一郎 総編集
本間研一, 大森治紀, 大橋俊夫 編

＜書評者＞ 齋藤宣彦 (聖マリアンナ医科大学名誉教授・内科学)

「標準生理学」は、1985年に第1版が上梓されてからすでに四半世紀が過ぎ、歴代執筆者の欄には斯界の泰斗が名を連ねている。本書は、発刊以来文字通り医学生用生理学教科書のスタンダードとなってきた。

このたび出版された改訂第7版は、本文だけで1,000頁を超え、カラーイラストも多く、各章の終わりには「学習のためのチェックポイント」が箇条書きで示され、巻末には「医師国家試験出題基準対照表」と「医学教育モデル・コア・カリキュラム対照表」が付されている。加えて44頁からなる別冊には、79項目に及ぶ論述試験問題「生理学で考える臨床問題」が解説付きで示されている。学生用としてこれ以上行き届いた教科書は類をみない。特に「生理学で考える臨床問題」は、臨床医を志す学生が生理学の重要性を意識す

ることで学習へのモチベーションを高める効果がある。

近年の医学・医療は、地を揺るがす巨大な列車のように轟音を立てながら驀進している。ぼんやりしていると、振り落とされそうな勢いで進歩しているといってもよい。筆者は、この列車から振り落とされないように、しゃにむにしがみついているつもりなのだが、ひょっとすると本人も知らない間に、すでに振り落とされてしまっているのかもしれない。

臨床医の場合、基礎科学の知識は大学を出て数年後にはそろそろ錆が出始め、臨床経験と反比例して学生時代の知識は化石となっていく。それを防ぐには、医学部卒業後も、①生理学をはじめとする基礎科学の教科書を気軽に開く習慣をつけることと、②最新の臨床医学の知識や技能を修得する努力をすることで、この2つは臨床医

の生涯教育における必須科目である。臨床の知識は、常に基礎科学に裏打ちされたものでなければ病態解析が極めて浅薄なものになってしまうことは、臨床に身を置く者ならば、皆感じているに違いない。病態生理という言葉はいささか使いすぎ気味だが、この言葉が頻繁に使われるゆえんは、生理学は日常の病態解析に応用可能な部分が多く、かつ他の基礎科学に比べて親しみやすいからだと思う。

そこで、本書は学生用教科書の範疇にとどめておくべきではないという結論に至る。本書では、新しい基礎科学の知識のみならず、現在の卒前医学教育の目標や臨床医学への橋渡しの内容を備えてあることで、医師の生涯教育用教科書としての役目も意識してつくられていることがわかる。編集や執筆に携わった方々の慧眼に敬服する次第である。

●B5 頁1,200 2009年
定価12,600円
(本体12,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-00301-8]
医学書院刊